平成３１年３月

甲斐市議会議長　長谷部　集　殿

甲斐市議会　甲斐市民クラブ
会長　五味　武彦

視察研修報告

下記の通り実施いたしましたので報告いたします。

記

1,　実施日　平成 30 年 11 月 5 日～7 日
2,　研修先　香川県小豆郡土庄町豊島、岡山県真備地区及び岡山理科大学
3,　参加者　斎藤芳夫、金丸寛、五味武彦、滝川美幸、横山洋介

視察内容

１、豊島美術館

豊島は昔から福祉の島と知られていたが、産廃事件で島が荒廃し、以後環境の再生に取り組み続け、現在は食と現代アートの島として発展している。その中心的な存在が豊島美術館。瀬戸内海を望む小高い丘にアーティスト内藤礼氏と建築家の西沢立衛氏により 2010 年に建設され、福武財団（ベネッセ）が維持運営している。

広大な敷地の一角の水滴のような形のドームが一つの作品で、天井にある 2 か所の開口部から、周囲の風や音、光を内部に直接取り組み、自然と建物が呼応する空間で一日を通して「泉」が誕生している。美術館の概念を超えた世界的に有名な現代アート作品。担当者に話では美術館単体では順調な経営で、海外からの見学者も多く、年間 75,000 人が来館し、各島々で開催される瀬戸内海国際芸術祭開催年は約 100,000 人が訪れるという。甲斐市で計画されているフラワー＆ミュージアム構想の参考として研修した。（写真左の集合写真奥がドーム）

２、豊島の棚田保存

美術館は棚田が広がる丘陵地にある。地下水に恵まれ、ここは古くから稲作が行われていたが、福武財団は土庄町と地元棚田保存会と協働して荒廃した休耕田の再生に取り組んでいる。現在は米作の他、野菜や果樹、植花で復元され、年秋には収穫祭が開催されているが、地元保存会会長の話では年々盛大な行事の裏には耕作者の高齢化と減少の問題があるという。豊島は人口 800 人の島。産廃の島を再生するため、住民をはじめ行政と企業それぞれが協力し再生を続けている。亀沢の棚田が観光資源としても有効な可能性を秘めており、一歩進んだケース。

３、豊島は産廃事件の舞台

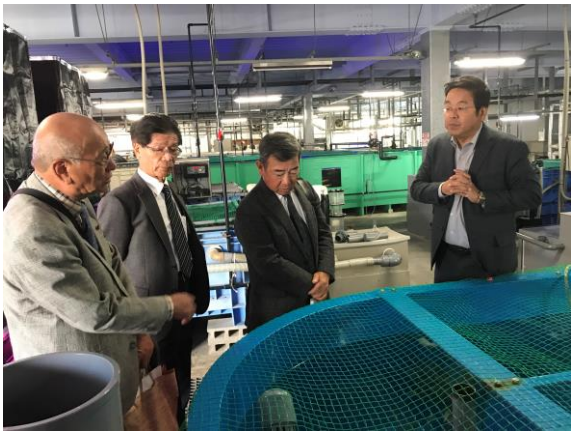
日本で最大級の産業物不法投棄事件が豊島で起きた。昭和 53,年、香川県の擁護のもと事業者により不法投棄が開始され、以後 13 年間にわたって処分業許可外の多種多様な廃棄物が持ち込まれ公害問題が発生した。昭和 50 年の計画時期から、住民の反対運動が起き、以後香川県知事の謝罪と現状回復に合意が成立する平成 12 年まで 25 年間闘いが続いた。最終的に撤去作業は平成 28 年まで要し、重金属やダイオキシンを含む環境ホルモン等の有害物質合計 94 万トンの廃棄物と汚染土壌を約 560 億円をかけて処分することになった。また、視察の当日は新たに地中から有害物質埋蔵の疑いで再調査が数か所で行われていた。反対運動の原動力となった廃棄物対策住民会議の元県議の石井氏に現地視察や住民会議の足跡や資料を丁寧に紹介していただいた。行政と住民を結ぶ議員の重責を改めて自覚するものだった。（左写真の正面の山の頂上まで産廃が持ち込まれた）

４、倉敷市真備地区の豪雨被害視察

7 月の豪雨被害で真備地区は死者 51 名、全壊約 4,278 棟、大規模半壊 530 棟、半壊 548 棟、一部破損 518 棟と甚大な被害を受けた。視察当日も市の職員は復旧作業中で説明は辞退し、現場に入った。当方も時間の都合で家屋の倒壊やバックウオーター箇所（写真）など惨状を視察するにとどまったが、被害から 4 か月たった家屋は広範囲に亘ってほとんどが空き家のまま。当時の災害対応や復旧活動の資料を基に、当市での対策はどうなのか検証し、今後につなげたい。

５、岡山理科大学工学部の養殖技術・好適環境水

人工養殖の一人者、岡山理科大の山本研究室を訪問。好適適環境水とはシンプルな人工飼育水のこと。海水の中から魚類に必要な成分をナトリウム、カリウム、カルシウム等に絞り込み浸透調節を可能にした機能水。淡水魚も海水魚も同じ水槽で飼育することができるという。好適環境水を使った養殖業のメリットとして①安心安全（人工に管理された環境の中で育成できる）、②成長が早い（早く出荷できる）、③,病気が発生しにくい（淡水でも海水でもないためどちらの病気も発生しにくい）、④階場所を選ばない（水源があればどこでも魚類の飼育が可能）、⑤水をリサイクル（濾過方式の改善ににより飼育水の節水が可能）ブラックタイガーの基礎研究、16 kgのマグロやウナギ、フグなどの出荷の他、ヒラメやアジなど研究している。甲斐市での夢の養殖産業ができないか可能性を研究したい。



（記：五味武彦）

参加者からのひとこと

・斉藤芳夫
岡山理科大学を訪れて
　あらかじめ、ある程度ホームページ等にて調査して訪問したがこの大学の山本教授の研究にかける熱意に圧倒されました。私たちが主に食べている海遊魚は乱獲による漁獲量不足、また途上国近海の汚染も心配であります。秩父多摩甲斐国立公園の山々が水源である甲斐市の水は貴重な資源であり、これがもたらす海への恵みは多大である。マグロ消費量日本一の山梨に安全安心な魚資源の確保は重大であり、山本教授の研究が陸上養殖に活かせないか、新しい産業まで発展出来ないか、今後検討してみたいと改めて思った。

・金丸寛
視察研修を終えて
　豊島産廃事件は終わっていない。一度破壊されたものの復旧は並大抵ではないことを痛感させられた。再生に向けての住民の力強さを感じた。真備地区の惨状には茫然とさせられた復旧までの道程を思うとその苦労が思いやられる。岡山理科大学工学部の養殖技術「好適環境水」は、“山梨でも活用できるのでは”という希望を持てるものであった。

・滝川美幸
倉敷市真備地区を訪れて
　倉敷市真備地区の豪雨災害の惨劇を目の当たりにして、改めて自然災害の恐ろしさを感じました。報道などで水災害の恐ろしさを感じていましたが、この様な災害は本市においても決してありえなくはない災害であると実感しました。本市においても水災害に対する対策は真摯に検討していかなければならないと改めて感じました。

・横山洋介
視察研修を終えて
　豊島は過去最悪で最大規模の産廃不法投棄として有名となってしまった豊島事件の地である。原状回復作業から18年が経過した今も作業は続き、回復の目処が立っていない。しかし、豊島は芸術の島として新たなイノベーションを感じた。真備地区においては、以前から活動をしている陸前高田市と光景が重なり、行政からの説明は聞けなかったものの住民の声をよく聞いた上の復興を願うところである。最終日の岡山理科大学の陸での海産養殖技術の進歩を目の当たりにし、海なし県山梨の未来を感じたところである。